

これまでの活動報告・ニュース

高等研究院名誉院長が就任

■高等研究院名誉院長 略歴



野依 良治 博士

(Dr. Ryoji Noyori)

1972名古屋大学教授、1997名古屋大学理学研究科長、2002名古屋大学高等研究院初代院長、2003理化学研究所理事長、2004名古屋大学特別教授、2000文化勲章受章、2001ウルフ賞受賞、2001ノーベル化学賞受賞



李 遠哲 博士

(Dr. Yuan Tseh Lee)

1973シカゴ大学教授、1974カリフォルニア大学教授、1994台湾中央研究院長、1986ノーベル化学賞受賞、1986米国科学メダル受賞、2003名古屋大学名誉博士

名古屋大学では、名古屋大学の国内的、国際的な存在感を高め、名古屋大学高等研究院の活動を一段と充実させることを目的として、かねてから野依良治博士（大学院理学研究科特別教授、理化学研究所理事長、2001ノーベル化学賞受賞）、李遠哲博士（1986ノーベル化学賞受賞）の両博士に名古屋大学高等研究院名誉院長に就任していただくことを予定しておりましたが、さる4月23日（月）に名古屋大学において野依良治博士に、4月25日（水）に台湾中央研究院において李遠哲博士に平野総長から任命書が手渡されました。任命書の手渡し後の懇談において、両博士とも名古屋大学及び名古屋大学高等研究院の発展・充実のため協力したいという旨のお話をいただきました。

高等研究院に名誉院長を置くことは、以下の意義があると考えられます。

- (1) 高等研究院は、名古屋大学国際諮問委員会において、名古屋大学のアカデミーとしての役割を発揮すること、そしてまた国際的プレゼンスを高めていくことが求められました。
- (2) こうした課題を実現するためには、世界的に著名な研究者からの国際的視点からの助言を仰ぎ、それを高等研究院の活動に活かしていくことが強く望まれます。
- (3) 高等研究院は、2002年4月の創設以降行ってきた世界的水準の研究および萌芽的研究の支援に加え、目下、新たに高等研究院

研究者育成特別プログラム（テニュアトラック制度）を実施しているところです。このような若手研究者の育成というきわめて重要な活動に対しても助言・提言がいただければ、同制度を成功裡に進める上で資するところがきわめて大きいと考えられます。

科学技術振興調整費若手研究者の自立的な研究環境整備促進事業 名大高等研究院研究者育成特別プログラム (テニュアトラック制度)が導入

「名古屋大学高等研究院研究者育成特別プログラム」は、平成18年度科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進事業」の一環として採択されたプログラムです。

高等研究院では、自立して高度な研究を推進できる若手研究者を育成するために、テニュアトラック候補者を国際公募し、部局による推薦に基づき優れた若手研究者を客観的に選考しました。これらの若手研究者に自由な研究環境を与え、個々の研究活動を支援するとともに、高度で広い視野と高い研究者倫理を有する若手研究者を育成することを目指しています。本プログラムでの若手研究者の任期は5年とし、3年目と最終年に、予め推薦部局と合意した審査基準に沿って中間審査および最終審査（テニュア審査）を行い、可となれば推薦部局の教員となります。

今回の応募条件は自然科学全分野、博士号取得後10年以内としました。NatureおよびScience誌等に公募広告を掲載し、専用ウェブサイトより公募を受け付けました（公募期間：平成19年7月1日～8月17日）。この公募に対する若手研究者の関心が高く、40以上の国・地域から総数で386件の応募が寄せられました。高等研究院会議をもって充てる選考委員会は、外部評価員のピアレビュー方式の書面審査の評価と推薦委員会からの意見を参考に、応募者を選考し、下記の15名の若手研究者を高等研究院特任准教授・同特任講師として採用しました。

採用者一覧

氏名・職名	伊藤 素行 特任准教授	推薦部局	理学研究科
研究テーマ	Notchシグナルの翻訳後修飾による調節機構とその発生における機能解析		

氏名・職名	榎本 篤 特任講師	推薦部局	医学系研究科
研究テーマ	AktおよびWntシグナル伝達経路におけるGirdinとそのファミリータンパク質の機能解析		

氏名・職名 **持田 陸宏** 特任准教授 推薦部局 環境学研究科

研究テーマ 有機エアロゾルの物理化学特性および
不均一反応過程とその気候への影響

氏名・職名 **前田 勝浩** 特任講師 推薦部局 工学研究科

研究テーマ 精密構造制御を基盤とした機能性分子の開発と応用

氏名・職名 **坂本 知昭** 特任講師 推薦部局 生命農学研究科

研究テーマ 農業的重要形質の発現制御機構の解明

氏名・職名 **森 英男** 特任講師 推薦部局 工学研究科

研究テーマ 分子センサーによるマイクロ・ナノ流れの解析

氏名・職名 **海老原 祐輔** 特任講師 推薦部局 太陽地球環境研究所

研究テーマ 次世代内部磁気圏系シミュレーションの開発と
磁気嵐研究の新展開

氏名・職名 **小林 晃人** 特任講師 推薦部局 理学研究科

研究テーマ 分子性導体における質量ゼロのディラック粒子による
新物性の研究

氏名・職名 **勝野 雅央** 特任講師 推薦部局 医学系研究科

研究テーマ 神経変性疾患の病態解明、治療法開発および
分子イメージングの開発

氏名・職名 **Stephan IRLE** 特任准教授 推薦部局 理学研究科

研究テーマ ナノカーボン工学とナノバイオ特性による量子化学の研究

氏名・職名 **竹内 努** 特任講師 推薦部局 理学研究科

研究テーマ 紫外線・赤外線を中心とする多波長データによる
銀河形成進化史の観測的・理論的研究

氏名・職名 **柳澤 聖** 特任講師 推薦部局 医学系研究科

研究テーマ プロテオミクス解析技術を応用したヒト癌並びに
呼吸器疾患関連分子の探索とその臨床応用

氏名・職名 **五島 剛太** 特任准教授 推薦部局 理学研究科

研究テーマ 生命科学：細胞内ダイナミクスのメカニズムの探求

氏名・職名 **清水 康弘** 特任講師 推薦部局 理学研究科

研究テーマ 核磁気共鳴を用いた強相関電子系における金属絶縁
体転移の機構の解明

氏名・職名 **渡辺 崇** 特任講師 推薦部局 医学系研究科

研究テーマ 細胞極性形成のin vitro/in vivoにおける統合的解析

福井康雄高等研究院教員、紫綬褒章受章

高等研究院教員福井康雄先生(大学院理学研究科教授、平成14年および平成19年度研究プロジェクト採択)が、「学術、芸術上の発明、改良、創作に関して事績の著しい方」に贈られる紫綬褒章を受章されました。平成19年度の福井先生の研究プロジェクトは、「サブミリ波からテラヘルツ帯に至る宇宙と地球大気の開拓的観測研究」です。福井先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

近藤孝弘高等研究院教員が受賞

「日本学術振興会賞」ならびに「日本学士院学術奨励賞」

高等研究院教員近藤孝弘先生(大学院教育発達科学研究科准教授、平成17年度研究プロジェクト採択)が、若手研究者を顕彰する第3回(平成18年度)日本学術振興会賞ならびに日本学術振興会賞を選考対象となる平成18年度日本学士院学術奨励賞を受賞しました。今回の受賞対象となった近藤先生の研究は、「国際関係における歴史教育政策に関する比較研究」です。近藤先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

近藤孝男院長が受賞

傑出した業績をあげ、文化、社会の発展、向上に多大な貢献をされた個人を顕彰する「朝日賞」

高等研究院院長近藤孝男教授(大学院理学研究科長)が、人文や自然科学など、わが国のさまざまな分野において傑出した業績をあげ、文化、社会の発展、向上に多大な貢献をされた個人または団体を顕彰する朝日賞を受賞しました。受賞理由は、「生物時計の分子機構に関する研究」において、「概日時計」と呼ばれる約24時間の体内時計の仕組みをシアノバクテリアを使って解明し、生物時計を再現することに成功したことによるもので、今後の生命科学に影響を与える研究と期待されています。近藤院長の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

上村大輔高等研究院教員が受賞

第60回「中日文化賞」

高等研究院教員上村大輔先生(大学院理学研究科教授、平成16年度研究プロジェクト採択)が、第60回(平成19年度)中日文化賞を受賞しました。今回の受賞対象となった上村先生の研究は、「海洋天然物の生物有機化学的研究」です。上村先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

全学教養科目「学問の面白さを知る」が開講

この講義は、高等研究院教員の研究成果を全学教育に役立てるため、平野総長の強いイニシアチブの下で、教養教育院と共同で企画したものです。本学に入学したばかりの学生が、高等研究院に所属する（あるいはかつて所属した）優れた研究者の講義を受講することにより、学問の面白さや研究に対する心構えを知ることが目的としています。講義は3つの単元から構成されており、地球、生命、環境、材料から歴史、教育、社会までの幅広い話題について、基礎知識から最先端の発展までわかりやすく紹介し、学問を楽しんでもらうことをねらっています。高等研究院は、同講義の専用ホームページ (http://www.iar.nagoya-u.ac.jp/Activities_Programs/IARgakumon.html) を開設しており、そこには、講義を担当する各先生の個人・研究室のページへのリンク、毎回の講義資料、講義内容を収録した音声・映像のファイル、講義風景の写真、および受講生の優秀レポートなどを公開してあります。

■ 授業内容一覧

担当教員 高等研究院副院長 奥村 隆平 教授 (大学院経済学研究科)

第1単元「地球、環境と材料」

目標 人間を取り巻く宇宙・地球環境の中で、人間が生存していくためには、それらの環境について深い知識を得るとともに、それらの中から生活に必要な様々な材料を獲得している事を学ぶ。

1. 「『地球温暖化』はアジアの気候をどう変えるか？」
安成 哲三 (地球水循環研究センター教授、高等研究院教員)
2. 「宇宙100の謎」
福井 康雄 (大学院理学研究科教授、高等研究院教員)
3. 「結晶と光の世界」
関 一彦 (大学院理学研究科教授、高等研究院院友)
4. 「ナノカーボンの科学ーセレンティピディーからの始まり」
篠原 久典 (大学院理学研究科教授、高等研究院教員)
5. 「ヒトとロボットの共生社会」
福田 敏男 (大学院工学研究科教授、高等研究院教員)

第2単元「歴史、教育と社会」

目標 人間が歴史の中でどのように学び、それをどのようにして後世に伝え、また、どのように現代社会が運営されているのかについて学ぶ。

6. 「中世ヨーロッパの修道院文化
ー古典はどのようにして現在まで伝えられたかー」
佐藤 彰一 (大学院文学研究科教授、高等研究院院友)
7. 「境界を越える歴史教育」
近藤 孝弘 (大学院教育発達科学研究科准教授、高等研究院教員)
8. 「アジア諸国に対する法整備支援」
鮎京 正訓 (大学院法学研究科教授、高等研究院院友)
9. 「経済学における現代の国際貿易論」
多和田 眞 (大学院経済学研究科教授、高等研究院教員)

第3単元「生命と自然」

目標 人間・動物の命の営みとその自然環境との関わりについて学ぶ。

10. 「行動から脳のはたらきを知る」
森 郁恵 (大学院理学研究科教授、高等研究院教員)
11. 「海洋を化学する」
上村 大輔 (大学院理学研究科教授、高等研究院教員)
12. 「時間を刻むたんぱく質分子」
石浦 正寛 (大学院理学研究科教授、高等研究院院友)
13. 「動脈硬化は18歳から始まっている」
貝淵 弘三 (大学院医学系研究科教授、高等研究院教員)
14. 「自然と伝統に学ぶ製品と生活」
武田 邦彦 (中部大学教授、高等研究院院友)

野依名誉院長・北住前院長が日進市で 公開討論会に臨む

～『知の時代』の新しい社会作りを提言～

高等研究院名誉院長野依良治博士（大学院理学研究科特別教授、理化学研究所理事長、ノーベル化学賞受賞者（2001年）、日進市名誉市民）および北住炯一前高等研究院院長（愛知学院大学教授）による公開討論会が2007年1月10日、日進市民会館（日進市折戸町）で開かれました。「知の時代を楽しく生きる」をテーマに、地域・家庭における教育の役割を考えることを目的でした。市民らの参加者約470名に達し、熱気溢れる大盛況となりました。

メインテーマの「『知の時代』の新しい社会作り」について、野依名誉院長は20世紀を「戦争や経済に象徴された競争の時代だった」と振り返った上で、「限られた資源の中で世界人口約63億人が、いかにして知識から知恵を生み出し、協調し合って生きていくかが課題である」と、新しい知の時代の課題を提示しました。その時代にふさわしい次世代を育てるには「観察や数式、図形などの『形式知』だけにとらわれず、子どもたちには文化や習俗、工芸、自然など形で表せないあらゆる『暗黙知』を身に付けさせるべき」と、指摘しました。また、団塊世代リタイア時代を迎えるにあたって、「日本の財産である団塊世代など社会全体が知を総合化させ、感受性に富んだ（次世代の）人間を育ててほしい」と、提言しました。

一方、日進市民でもある北住前院長はまちづくりと大学の連携について、「自治体と大学間との交流や連携が、日進のまちの発展につながれば」と、期待を寄せました。

また、参加者からは、両院長の少年時代のエピソードや普段の生活に関する質問もありました。野依名誉院長は、「生き方」にも触れ、「意味のある生き方を求めて人間は生きている。先祖を敬い、文化や伝統を継承する心を重んじて一生懸命に生きてほしい」と、継承の重要性を強調しました。

今回の公開討論会の映像は、高等研究院のホームページ（<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp/movie/nishin/>）において公開しているので、ご覧ください。



野依 良治 名誉院長



北住 炯一 前院長

名古屋大学レクチャーシップ表彰楯のデザインが決定

名古屋大学レクチャーシップの表彰楯のデザインが決まりました。名古屋大学レクチャーシップは、世界最高水準の研究者を招聘し、高等研究院スーパーレクチャーの一部として行うものです。

国内外で多数の受賞歴がある西大記画伯が「麒麟」を題材に表彰楯のデザインを行いました。麒麟は、古来の想像上の霊獣で知恵の象徴でもあり、最も傑出した人物を表すものとされてきました。参考にした絵は、東西交流のあかしとして1200年間大切に保存されてきた正倉院中倉所蔵の絵紙であり、軽やかな筆致で麒麟や鳳凰などが描かれています。麒麟の出現は、聖人が現れ、平和で学問が尊重される世の中になる前兆であるとい伝えられてきました。西画伯によれば、今こそ麒麟が出現し、世界が平和になり、学問が発展するようにとの祈りを込めて制作したとのことでした。

昨年10月10日に開催された第1回名古屋大学レクチャーでは、フランス学士院会員、コレージュ・ド・フランス副学長のミシェル・ザンク博士が講演を行い、平野総長から感謝状が献呈されました。今度、新たに制作される表彰楯も博士に贈られました。



表彰楯(中面)

高等研究院スーパーレクチャーが開催された

さる平成18年10月10日(火)、高等研究院の「第2回スーパーレクチャー」が、野依記念学術交流館2階のカンファレンスホールにおいて、本学教職員・学生・一般市民など、約100名の参加を得て開催されました。

このレクチャーは、国際的に最先端を行く学術活動の一端を広く社会に伝えることを目的として、昨年度に引き続き開催されたもので、世界最高水準の研究者を招聘して行われる講演（名古屋大学レクチャー）と、高等研究院で採択された研究プロジェクトを終了した高

等研究院教員による研究成果の発表（高等研究院レクチャー）の2部構成で行われました。

田上英一郎前高等研究院副院長の司会進行のもと、始めに、北住前高等研究院長の趣旨説明及びあいさつがあり、次いで、高等研究院レクチャー及び名古屋大学レクチャーが行われました。

名古屋大学レクチャーでは、フランス学士院会員、コレージュ・ド・フランス副学長のミシェル・ザンク博士が「西洋における詩歌の源泉—中世吟遊詩人の歌とその解説書—」（フランス語、同時通訳付き）と題した講演を行いました。ザンク博士は、吟遊詩人によって作られた詩が解説付きで出版された際に、その解説が、時にははずれなものがありながらも、興味深い心理分析を含むことがあり、後の心理小説の芽ばえともなったことなど、多くの示唆に富む内容を話しました。講演後には、参加者と、予定時間を超えての活発な質疑応答も行われました。

高等研究院レクチャーでは、森郁恵理学研究科教授による「線虫行動の研究から脳・神経系のしくみを理解する」、内田浩二生命農学研究科准教授による「体の中でできる“さび”の科学」、笹井理生工学研究科教授による「ソフト分子マシン」、新美智秀工学研究科教授による「高クヌッセン数流れのミクロスケール・アナリシス」、後藤節子医学部保健学科教授による「妊娠期および産後女性の精神的健康に関する研究」、そして武田邦彦工学研究科教授による「アイヌ文化と科学技術」の6つの報告がなされ、高等研究院での研究成果が披露されました。

■プログラム

第2回 高等研究院スーパーレクチャー 名古屋大学レクチャー・高等研究院レクチャー

日時 2006年10月10日（火） 10:00~16:45

会場 名古屋大学 野依記念学術交流館 カンファレンスホール

◎開会の挨拶（院長）

10:00~10:15

◎高等研究院レクチャー [報告30分・質疑5分]

10:15~12:00

「線虫行動の研究から脳・神経系のしくみを理解する」

森 郁 恵 理学研究科・教授

「体の中でできる“さび”の科学」

内 田 浩 二 生命農学研究科・助教授

「ソフト分子マシン」

笹 井 理 生 工学研究科・教授、元情報科学研究科・教授

◎Certificateの贈呈（総長からザンク博士に）

13:00~13:15

◎名古屋大学レクチャー [レクチャー60分・質問20分]

13:15~14:35

西洋における詩歌の源泉

—中世吟遊詩人の歌とその解説書—

（フランス語、同時通訳付き）

招待講演者 ミシェル・ザンク博士

フランス学士院会員、コレージュ・ド・フランス副学長

◎高等研究院レクチャー [報告30分・質疑5分]

15:00~16:45

「高クヌッセン数流れのミクロスケール・アナリシス」

新 美 智 秀 工学研究科・教授

「妊娠期および産後女性の精神的健康に関する研究」

後 藤 節 子 医学部保健学科・教授

「ソフト分子マシン」

武 田 邦 彦 工学研究科・教授



高等研究院フォーラム2006

「公正な科学研究に向けて—業績評価と研究倫理—」 が開催された

さる平成18年12月5日（火）、シンポジウムホールにおいて、「高等研究院フォーラム2006」が、学内外の研究者・学生・一般の方々など約100名の参加を得て、開催されました。

本フォーラムは、高等研究院教員を中心に、特定の研究テーマに主眼を置き、研究成果を広く学内外に発信するため年1回程度開催するもので、今回は、高等研究院と本学公正研究委員会の主催により、高等研究院研究者育成特別プログラムの発足を記念して催されました。また、本学が平成18年7月に制定した「名古屋大学における研究上の

不正行為に関する取扱規程」、「名古屋大学公正研究責任者及び公正研究委員会に関する規程」をアピールする目的も兼ねました。

フォーラムでは、まず、平野総長、北住前高等研究院長のあいさつの後、奥村隆平高等研究院副院長を司会とし、4名のパネリストによる講演が行われました。最初に、浅島誠東京大学大学院総合文化研究科教授（日本学術会議科学者の行動規範に関する検討委員会委員長）が、「日本の研究者は今、どのような状況にあるのか」と題し、「研究上の不正問題については、発生を未然に防ぐことが重要であり、そのためには、研究倫理教育や、研究者間の人間関係も含めた健全な研究環境の醸成に向けて、組織的な取組を継続的に展開することが求められる」と述べ、池内了総合研究大学院大学教授が、「研究者のモラル・評価・社会的責任」と題し、「研究者は、『倫理責任』、『説明責任』だけでなく『社会的責任』も全うすべきである」と強調しました。続いて、佐古田三郎大阪大学大学院医学系研究科教授、（同大学同研究科研究公正委員会委員長）が、「科学の本質とその社会における“営み”について」と題し、「『科学は私達にとって一体どんなものなのか』というところから出発し、社会との関係を議論する必要がある。科学の本質を知り、社会との関係を知ってこそ初めてその倫理について語る事ができる」と述べ、毎日新聞科学環境部「理系白書」取材班記者の永山悦子氏が、「『科学者＝性善説』のままでいいのか」と題し、不正事件の具体例をいくつか挙げた上で、「研究者の『小さなズル』＝倫理的無感覚を生みだしかねない研究環境の密室性」に対して警告を発し問題提起をしました。

これらの講演を受け、コメントーターの濱田道代法学研究科教授から4名のパネリストの発言についてまとめが、岡本耕平環境学研究科教授から「名古屋大学における研究上の不正行為に関する取扱規程」、「名古屋大学公正研究責任者及び公正研究委員会に関する規程」についての説明があり、続いて、パネルディスカッションが行われました。

フォーラムに引き続き行われた懇親会では、パネリストの方々に加え、学内外の様々な分野の研究者など多くの方々が参加し、活発に議論する姿なども見られ、大変有意義なものとなりました。

■プログラム

名古屋大学高等研究院研究者育成特別プログラム発足記念
名古屋大学高等研究院フォーラム

公正な科学研究に向けて—業績評価と研究倫理—

日時 2006年12月5日(火) 13:00~17:00

会場 名古屋大学 シンポジオンホール

主催 名古屋大学高等研究院・名古屋大学公正研究委員会

◎開会挨拶（名古屋大学総長・高等研究院長）
13:00~13:15

◎パネリスト
13:15~13:40
「日本の研究者は今、どのような状況にあるのか」
浅島 誠 東京大学大学院総合文化研究科教授
日本学術会議科学者の行動規範に関する検討委員会委員長

13:40~14:05
「研究者のモラル・評価・社会的責任」
池内 了 総合研究大学院大学教授

14:05~14:30
「研究者のモラル・評価・社会的責任」
佐古田 三郎 大阪大学大学院医学系研究科教授
大阪大学医学系研究科研究公正委員会委員長

14:30~14:55
「『科学者＝性善説』のままでいいのか」
永山 悦子 毎日新聞科学環境部「理系白書」取材班記者

◎コメントーター
14:55~15:05
濱田 道代 名古屋大学大学院法学研究科教授
15:05~15:15
岡本 耕平 名古屋大学大学院環境学研究科教授

◎休憩
15:15~15:30

◎パネルディスカッション
15:30~17:00

◎懇親会
17:15~18:45



平成18年度高等研究院セミナーの活動内容について

第13回 平成18年7月25日

生物時計分子装置の作動原理の 原子レベルでの解明に向けて

石浦 正寛 遺伝子実験施設 教授

藍色細菌の生物時計分子装置は主に3つの時計タンパク質 KaiA、KaiB、KaiCから構成されている。我々はX線結晶構造解析により好熱性藍色細菌の時計分子装置の原子構造を解明し、その作動原理を解明しつつある。

周産期女性のマタニティ・ブルーズおよび 産後うつ病に関する文理複合的研究

後藤 節子 医学部保健学科 教授

妊娠期・お産後のうつ病の発症は子どもの情緒的発達への影響が懸念されます。私たちは産褥うつ病の病態生理、成因の解明と、子どもの発達に与える影響を検討し、この時期の女性の精神的健康への支援策の確立を目指した文理複合的研究を紹介します。

第14回 平成18年9月26日

動物たちが季節を感知する仕組みを探る

吉村 崇 生命農学研究科 助教授

動物たちは渡りや繁殖などの営みを毎年決まった時期に正確に繰り返すことで巧みに困難な季節を乗り切っています。最近の研究で動物たちが季節を感じとっている仕組みが少しずつわかってきたので、その戦略について紹介します。

ナノ構造の上に拓く新デバイスの世界

水谷 孝 工学研究科 教授

現代の情報化社会はデバイスの微細化・高性能化とともに発展してきた。そのデバイスの寸法はナノメートルに及ぼうとしている。このようなナノメートルの世界では電子は粒子と波の性質を併せ持ち、これまでとはまったく違った新しい概念のデバイスの創製が期待できる。本セミナーではこのようなナノ構造を用いた新デバイスについて、われわれのグループが研究しているカーボンナノチューブデバイス、共鳴トンネルデバイス、ヘテロ構造デバイスについてその概要を紹介する。

第15回 平成19年1月23日

海洋生物に『くすり』を求めて

上村 大輔 理学研究科 教授

光り輝く海に限りない魅力を感じるのは私だけではないでしょう。海は生命の源、あるいは命の揺りかごであり地球上のすべての生物にとっての宝物です。

さて、自然科学者にとって未知なる深遠な謎を含む海には解き明かさねばならない研究対象があります。地球科学的な大きな規模での展開もありますが、私たちがのような化学者にとっても、生物資源、化合物資源としての海には大きな期待を寄せています。数十億年の時間をかけて磨き上げられた美しい有機化合物の宝庫としてみた時、化学者の探究心が大いにかき立てられるのです。「クラゲやシラスはなぜ日焼けしないのか」、「オニヒトデは何故サンゴが好きか」、「サンゴの白化現象とは」など多くの疑問が次々とわき上がります。このような疑問に



お答えしながら海の生物からの贈り物『薬となりうる有機化合物』について私達の研究を中心にご紹介致します。

できる限り多くの生物写真を交えながら、最新の天然物化学やケミカルバイオロジー（化学生物学）の世界へと皆さんを誘いたいと思っています。

草稿を通して浮上する新しいソシユール像について

松澤 和宏 文学研究科 教授

ソシユールは、現代言語学や構造主義、記号論の始祖として知られています。しかし彼の名著と見なされてきた『一般言語学講義』は、ソシユールの手による著作ではなく、弟子たちが残された草稿や学生の聴講ノートをもとに執筆した書物であり、厳密に言えば弟子たちの編著書です。問題は、ソシユールが1890年代前半に構想していたことが確かな「書物」の刊行を何故に生前断念放棄してしまったのか、という点にあります。彼の遺した膨大な草稿群から浮上してくる新しいソシユール像とはいかなるものか、その一端を、彼の1891年のジュネーブ大学就任講演の草稿を読み解きながら、時間と空間の座標軸から逃れてしまう言語ラ・ラング (la langue) という新たな概念の誕生過程に迫りたいと思います。

人事について

第四代院長の北住炯一教授は、平成19年3月31日付で退任されました。この異動に伴い、院友の近藤孝男教授（理学研究科長）が4月1日付で第五代院長に任命されました。また、副院長の田上英一郎教授が平成19年3月31日をもって任期満了となり、運営推進委員であった坂神洋次教授（生命農学研究科）が、副院長に任命されました。山田弘明教授（文学研究科）、佐藤正俊教授（理学研究科）、大西昇教授（情報科学研究科）は平成19年3月末日付で運営推進委員を退任されました。平成19年4月1日から新たな運営推進委員として、野口裕之教授（教育発達科学研究科）、増田知子教授（法学研究科）、石井健一郎教授（情報科学研究科）、八田武志教授（環境学研究科）にご参画いただいています。

2007年度の活動予告

高等研究院フォーラム2007の開催

高等研究院フォーラム2007を平成19年11月30日（金）に、名古屋大学IB電子情報館の大講義室で開催します。今回のテーマは「若手研究者の育成とテニュアトラック制度 ―これからの大学人事改革を考える―」です。

「知の時代」の国際競争が激化する中、研究者の量と質の確保、特に創造性・柔軟性豊かな若手研究者の養成・確保の重要性がますます高まってきていることは言うまでもありません。創造的かつ競争的な研究環境を実現し、能力のある若手研究者の意欲を高めるとの観点から、人事透明性の高いテニュアトラック制度の導入が不可欠であるとの認識が広がっています。こうした中、平成18年度より文部科学省は科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進プログラム」を発足させ、世界的研究拠点を目指す研究機関において、テニュアトラック制度を導入する試みを支援しています。高等研究院のプロジェクト「高等研究院研究者育成特別プログラム」はその一環として採択されました。

現在、全国の21の大学が科学技術振興調整費により、テニュアトラック制度の導入を進めているが、テニュアトラック制度は人材の流動化が進んでいるアメリカのような社会でうまく機能しているが、日本の大学社会に根付かせるために、様々な配慮や工夫をする必要があると思われます。こうした背景の下、上記テーマに関するフォーラムを開催し、テニュアトラック制度の確立および定着における問題点、研究支援と研究評価のあり方などについて多様な視点から意見を交換し、これからの大学の人事改革のあり方について議論したいと考えています。興味のある方はぜひご参加下さい。

■プログラム

名古屋大学高等研究院フォーラム2007

若手研究者の育成とテニュアトラック制度
―これからの大学人事改革を考える―

日時 2007年11月30日（金） 13:00～
会場 名古屋大学IB電子情報館 大講義室
主催 名古屋大学高等研究院

13:00～13:10

開会の辞

山本 進一 教授（名古屋大学理事・副総長）

13:10~13:40

若手研究者の活躍促進のために

高比良 幸蔵 基盤政策課人材政策企画官 (文部科学省科学技術・学術政策局)

13:40~14:10

名古屋大学のテニュアトラック制度について

近藤 孝男 教授 (名古屋大学高等研究院院長)

14:10~14:40

東京農工大学のテニュアトラック制度について

柴田 治呂 教授 (東京農工大学若手研究支援室長)

14:40~15:20

アメリカのテニュアトラック、その制度と根底に流れる理念

菅 裕明 教授 (東京大学先端科学技術研究センター)

15:40~17:10

パネル討論会

司会:坂神 洋次 教授 (名古屋大学高等研究院副院長)

17:10~17:20

閉会の辞

奥村 隆平 教授 (名古屋大学高等研究院副院長)

17:30~

懇親会



第3回高等研究院スーパーレクチャーの開催

第3回高等研究院スーパーレクチャーを平成20年3月13日(木)に、経済学部第1講義室で開催いたします。今回は、「人体・生命の不思議(仮題)」をテーマとし、講師として、高等研究院長・理学研究科長の近藤孝男教授、生命農学研究科の吉村孝准教授、理学研究科の松本邦弘教授、医学研究科の貝淵弘三教授の4名を予定しています。

プログラムなどの詳細につきましては、今後、高等研究院ホームページ (<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>) とポスター、チラシなどで全学に向けて公開します。興味のある方はぜひご参加下さい。

高等研究院セミナーの開催

平成19年度には、本院教員先生を主に話題提供者とする高等研究院セミナーを3回開催します。詳細につきましては、今後、高等研究院ホームページ (<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>) とポスター、チラシなどで全学に向けて公開します。講師の先生方には、専門外の方々でも分かりやすい講演をお願いしてあります。皆様、奮ってご参加ください。

第16回 平成19年7月24日

有機合成化学からケムバイオケム
~全合成から活性発現分子機構解明に向けて~

磯部 稔 生命農学研究科 教授

動物の模様は色素細胞の相互作用が作る波である

近藤 滋 理学研究科 教授

第17回 平成19年9月25日

現代国際貿易理論の展開

多和田 眞 経済学研究科 教授

惑星からの手紙 ~高圧の氷の科学~

奥地 拓生 環境学研究科 助教

第18回 平成20年1月22日

脊髄損傷は治せるか?

門松 健治 医学系研究科 教授

科学者の不正行為 — その背景と防止策

山崎 茂明 愛知淑徳大学図書館情報学科 教授

